

## (口絵解説)

## 花の病害虫(8)——グラジオラス——

## グラジオラスの生産状況

グラジオラスの生産は1985～90年の増加期以降栽培面積は360ha前後で横這い状況を示している。球根類としてはユリ類に次いで多いが、多くの球根類と異なって露地栽培が中心となっているのが特徴といえる。

切花栽培では鹿児島、長野、茨城、静岡が生産地となっており、特に鹿児島での生産量が多い。栽培面積では平成3年度で約360haのうち、露地が340haで生産額は約35億に達している。栽培面積は横這いだが生産額は毎年10%程度多くなっている。

茨城県を中心とした球根生産は1980年代当初の200haをピークに漸減し、ここ数年は120ha、生産額3.6億前後で横這いとなっている。

施設での栽培面積は全体の5%、生産額は10%不足にとどまっている。

栽培型としては球根栽培では3月に定植、9～10月に球根を収穫し、この間7月に摘花するのが一般的である。切花栽培ではトンネルによる半促成型により6～7月の収穫、露地栽培による7～8月の収穫、それに球根の低温貯蔵による9～11月出荷がある。

## グラジオラスの栽培で発生する病害虫と防除

病害としては、球根腐敗病、首腐病、ボトリチス、乾腐病、赤斑病などがあるが最も致命的なのはウイルス病である。特にBYMVを中心としたウイルスは栽培上最大の問題となる。葉では白いかすり状の縞が入り、花では花卉に口絵写真のようなモザイクが入るため商品価値がなくなる。葉の症状はハダニの被害としばしば見間違われるが、ハダニの場合は白い脱皮殻と黒い排泄物が葉についているので区別される。このほかのウイルスとしてCMV、TRSVがあり、特に土壤中のオオガタハリセンチュウによって伝播されるTRSVについては海外からの球根輸入の大きな障害となっている。

BYMVなどはアブラムシにより伝播されるので、完全な防除は難しいので健全球根からの茎頂培養によるウイルスフリー株の増殖が最も期待されている。

栽培期間中はアブラムシの寄生を回避する必要があるが、特に初期の飛来を回避する目的でシルバーテープを周辺に張ったり、伝染源となるインゲンなどのマメ類を作付けしないようにするのは基本である。他の病害は他の球根類と共通する種が多く、球根の貯蔵中の過湿、発

芽後の天候に左右される病害が主体となる。

害虫の種類は他の球根類にくらべ多い。アブラムシ類、ハナアザミウマ類、ハダニ類のほか、葉を中心に食害するヨトウガ、ヤブキリ、ナシケンモン、ドクガなどが寄生する。このほか茎の中に食入するフキノメイガ、根に寄生するセンチュウ類などがある。そのうえ、1986年ごろからグラジオラスアザミウマの海外からの侵入があり、一層防除体系が複雑になっている。特に切花栽培では花の被害が激しくなるので出蕾前に防除が完全でないと花の被害が避けられない。本種は球根に寄生して移動し発生源となることが最も重要と考えられるので、常発地帯では球根消毒が必要である。発芽後の葉への寄生を認めたら、アセフェート水和剤、プロチオホス乳剤などの初期散布が有効である。ヨトウガの発生も多く幼虫による葉の食害、時に花の食害もみられる。球根養成の密植栽培では時にフキノメイガが茎内に食入する。食入後の防除効果は十分認められないので露地栽培では5月の若い株のうちにヨトウガなどの同時防除をかねてMEP剤などを散布することにより食入を回避できる。カンザワハダニを中心としたハダニ類の発生は特に施設栽培で多発することがあり、ハダニ特有の白いかすり症状になり発育が抑制される。露地栽培でも恒常的に発生し、7～8月に1～2回の殺ダニ剤の散布が必要となる。8月にはヤブキリ、ナシケンモン、チャハマキなども寄生するが、特に被害として大きくなることはない。特に球根栽培では防除の必要はないことが多い。

上記のような病害虫のため露地栽培でも一作最低5～6回の防除が行われており、特にグラジオラスアザミウマの発生により防除回数が増加している。切花栽培では出蕾期までに防除を終わらせておかないと、開花後の薬剤散布は他の花以上に汚れの原因となりやすいので注意する。また植え付け直後のネクリムシ類の被害もあるので、土壌施用剤としてダイアジノン粒剤などを施用し、初期のアブラムシなどとの同時防除をかねるとよい。病害のほうには特に触れなかったが土壌病害の乾腐病防除のために球根温湯消毒を行う場合はグラジオラスアザミウマとの同時防除を狙ってアセフェート、MEP剤などを使用するとよい。

以上、主な害虫を中心に記したが、最大の問題点はウイルスであり、輸入する上でも大きな障害となっている。ウイルスフリー株からの茎頂培養による生産もかなり行われており、今後は大量増殖技術により生産が安定していくものと期待される。

(茨城県立農業大学校園芸部 中垣至郎)